責任者 興梠（こうろぎ）さんのお話

Nextremer は今年で5期目のベンチャー企業です。東京・高知・インドを拠点に、AI関連技術の研究開発（銀行の窓口での対応などを大きな会社と共同研究）と、対話エンジン（人としゃべることができるプログラム、ロボットの脳みその部分であるソフトウェア）の開発を行っています。

「人・高知・能（じんこうちのう）」戦略!!!「高知を人工知能（新産業）の中心へ」・・・「なぜ高知なのか」、とよく聞かれます。きっかけは、東京で仕事をしているとき、高知県出身のスタッフが「高知でやりたい」とぽろっと言ったことが始まりです。一人のスタッフと故郷のつながりが、人工知能研究開発企業を南国市に誕生させたともいえます。空港や高速道路ICにも近いという利便性、地震などの災害時でも、津波の心配がないなどの立地条件も、大きな理由になりました。

高知には課題がたくさんあります。人口が少ない、若者が高知から出ていく、市場が小さい、全国の10年先を行くと言われている高齢化など、高知県はまさに「課題先進県」です。

私たちの仕事は、課題意識を持ち、それを解決するため、テクノロジーを使って、一緒に問題を解決していくソフトウェアを開発しています。

その一例として、本山町のミニデイサービス「リハビリキッチン」（高知市NPO法人が考案）では60～90代の集落の方が2週間に一回集まって料理を作ったり、食事を楽しむんでいます。その活動の様子について一人一人の表情などを撮影し、その場がどの表情から感情を分析し、その場がどれだけ盛り上がっているか、どれだけ元気な人がいるかを数値化して、人工知能で満足度を検証しています。これを「人・高知・能戦略」の第1号プロジェクトとして、広めていきたいと考えています。課題が多い高知はその成果をいち早く確保できる場所だと思います。

その他にも《ピクレトリ》と言うアプリでは、「明日高知駅でお土産を買う」と話しかけると、アプリが理解して、翌日、高知駅に行ったときに、「お土産を買ってね！」と教えてくれます。また《万デジ郎に聞け！》と言うウェブサービスは高知の事を教えてくれるウェブサービスで、県外の人にアピールしたいと考えています。

また、ロボットに鎧を着せた《AI-Samurai（エーアイ・サムライ）》は、アメリカの世界的なイベントSXSWに参加し、人の画像や表情に反応して話す技術を披露し、自社の広報の一員となっています。

【取材後に】

9月末、高知新聞に掲載され、ご存知の方も多いと思いますが、高知銀行本店に「Nextremer」などが製作した、人工知能を活用した対話システム「頭取くんと秘書子ちゃん」がお目見えしました。話しかけると適切な答えを導き出し、音声で答えてくれます。AIロボットの「頭取くんと秘書子ちゃん」は窓口で銀行サービス案内のほかユニークな答えも用意していて、10月31日まで展示し、データ収集を行いました。人工知能というと自分の今の暮らしとは、縁遠いように感じていましたが、意外と身近にある物だと思いました。

夢の人工知能

人工知能は人間より賢いところがあります。人工知能自身が繰り返し学習する技術が入っているからです。ロボットと人工知能が合体したら産業構造も変わるでしょう。文明の利器で便利になることは確実ですが、人間の自分にしかできないことも絶対にあると思いました。

我が家では毎日人工知能の備わった炊飯器にご飯を炊いてもらっているので、美味しいご飯がいただけます。炊き上がるまで、かなり奮闘している音がしますが、炊き上がりを知らせてくれます。毎日ホカホカの美味しい食事ができる幸せがあります。

自動車も自動運転の時代が近づいているような気がします。自動運転が始まれば、カーナビに電話番号で目的地を入力して乗り込めば、そこに連れて行ってくれるようになるかもしれません。電車やバスに乗っているように風景を見ながら走れるかは分かりませんが、運転は楽ちんになる気がします。

ものづくりの現場では、AIやロボットの活用により「第四次産業革命」が期待されています。高知・南国市を拠点に、世界にはばたく企業の姿を今後も注目していきたいと思います。

委員長のコメント

「南国オフィスパークに、人工知能の研究開発をする会社ができたのを知っていますか。」

「そんなベンチャー企業が身近にあるなんて、すごいですね。」

「南国市民もあまり知らないでしょう。ぜひ紹介したいですね。」

今回の特集は、編集委員会でのこんな話題から始まりました。

先端機器の機能を十分には理解できていない私にとって、人工知能の取材は難解なものになるだろうなと不安でした。しかし、丁寧な説明をしていただいたうえ、質問にも分かりやすく答えてくださり、大変有意義な取材ができました。

それ以来、どんどん進化していくロボットやカメラ、車などのニュースに触れると、人工知能の開発が、高知の課題解決の力になるだろうと思い、これからに興味が湧きます。南国にその拠点が出来たことを誇らしく感じ、今回の特集で紹介できてよかったなと思います。

ご多忙な中、取材に応じてくださいました皆様に、心より感謝申し上げます。